
魔王と輪舞曲を

ひらみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と輪舞曲を

【Nコード】

N2273BA

【作者名】

ひらみ

【あらすじ】

4月、初春。

女性だけの花園『エリシオン女学院』に入学した鹿島恵は一人の不思議な『ヒト』に出逢う。そこから巻き起こる怪奇事件。

恵を中心に回る失踪事件の結末は如何に。

少女の門出とその冒険に

やわらかな日差しを受け止めながら、わたしは歩いている。
足取りは軽く、淀みを感じさせない。

下ろし立ての制服の所為だろうか、身体に羽が生えたみたいに軽快だ。

白のブラウス、その上に着込んだ紺色のブレザー、首もとにワンプointの赤い柄のリボンが風に煽られて小さく揺れる。

緑を基調とした白と深緑のチェック柄があしらわれたプリッツスカートが、スラリと伸びた足の動きに合わせ小躍りし、まるで新たな門出を祝福しているようだ。

見慣れた景色すらも今日はどこか輝いて見える。世界中の息吹を感じ取れる。

まるで花が咲いたように、わたしの心にも一点の光がある。
親しみ深い商店街を抜けていくと、馴染みの薄い駅前通りへ。
そもそも駅に入るような用事なんて限られている。

精々となり町に服や小物を買いにいく程度だ。

田舎町はなにかと物揃えが悪い、なのでとなり町までいつも出向いていたりするわけなのだが。

それはさておき、
小さな駅に入ると、二度、三度と見慣れぬ時刻表を眺めて逡巡する。

なぜなら今日の電車はいつも乗る電車とは違うのだ。

少しだけドキドキしてるかも。

鼓動がとまらない。

なぜなら今日は高校の入学式。

この春、わたしこと、鹿島恵はエリシオン女学院かしまのくみに入学することになったのだ。

やってきた電車に乗り込むと、ドア近くに待機する。

車内を見渡してみるが、それほど人気はない。

少しだけ早めに登校したのが幸を期したのだろうか、それとも元々こつち側に通勤するような人間が居ないだけなのかもしれない。

わたしは再び、振り返って景色を眺める。

眼下には見慣れた街、それらが段々と遠ざかっていくのが見える。

幾分、寂しさも感じるがそれよりも緊張のほうに優っているかも。

なんとたつてあの名門と謳われるお嬢様学校である『エリシオン女学院』に入学するのだ。

初等部から中等部、高等部、そして大学まですべて、敷地内に収まっている超巨大学院。一貫した教育を施すことで真の人間に足る人格育成を目指すという方針らしい。

そこらへんの事情はまるでわたしには分からないが、古い『しきたり』というか伝統などが未だに息づいている現代では希な学校らしい。

なぜ自分が入学する学校を『らしい』なんて言葉で片付けてしまっているのかというと、話すところは長くなってしまつから要約させてもらつと『たまたま』なのだ。

本来ならば、今まで自分が住んでいた街になる高校に通うべきなんだろう、と思う。

でもわたしは嫌だった。

今までの生活も、今までの街も、今までの友人も、今までのすべてが 嫌になってしまった。

環境に罪はない、すべてはわたしの粗暴な行いの結果。

軽拳妄動、
自業自得。

中学をやり直せるといふのなら、わたしは間違いなくあの日、あの時をセレクトするだろう。

思い出すだけで胸の奥がチクリと痛む。

あれは帰らぬ黄金の日々で、

はちみつみたいな甘い記憶をコールドのような真っ黒の珈琲が塗り潰すように、

わたしの心の瑕は未だ癒えきっていない。

だからあの日々の思い出を遠ざけたくて、思い出してしまう要因から逃れたい一心で、なんとなくエリシオン女学院を志望した。

正直に言えば、受かる気などなかったのだ。

わたしは中学三年半ば辺りの間、部屋に籠もりきって忸怩の淵で彷徨していた。

生きてることが嫌になって、自暴自棄に陥り、この世界のすべてを恨んだりしていた。

そんな中、ただ親を納得させる動機が欲しかったというだけの理由で受けた無謀な志望。

あの時のことを思い出すことは恥ずかしい 完全に一人、闇の中で自傷行為をしていたわたしは、親身になってくれた友達の力もあって、完全に喪失していた社会性を取り戻すことが出来たのだ。

これはまた別の話。

しかし神様は意外なところで天恵をくださるのだ。
無謀だと思われた志望校の合格通知。

晴れてわたしはエリシオン女学院に合格し、今日その一員になるべく登校している。

そんなことを考えている内に隣町の駅、久里砂市に到着したらしい。

わたしは出勤するサラリーマンの間を潜って、階段を早足で駆け

下りていく。

改札口に切符を押し込むと軽快な音と共に私と出口を隔てるためのドアが開いた。

ここからは自分の未知の世界、想像するだけで胸が張り裂けそうになるほど鼓動が早まる。

1歩。

2歩。

3歩。

鼓動に合わせ踏み出す足　改札口を通り抜けて駅前まで駆け出す。

ステップを踏んでトンつと両足で踏みしめた。

ここが久里砂市。

ここからわたしの新しい生活が始まるんだ。

/

先に行っておくと

わたしは方向音痴である、それもかなり重度のくらいにあると言っても誇張じゃないくらい。

見知った街でも、すこし回り道や知らない曲がり角を行くと、方

角を見失う。異次元に迷い込む。

方向音痴の人間にしか、これは分からない感覚だろうけど、地図なんて無意味なのだ。あれは方角や現在位置を正確に把握していてこそ初めて意味を成すものであって、踏み出した瞬間に異空間に迷い込んでしまう異邦人にはなんの意味もなさないので、

結論から言うと、わたしは大いに迷った、大通り道沿いに歩けばいいと妹に言われて、地図まで渡された。事前に細かくチェックを入れて迷わないように最前準備をした、というのに結果としてはその努力はムダだったと言うしかない。

わたしは遠くに聳える学院のシンボルとも云う『時計塔』を諦観の目で見つめながら、思わず溜息をついた。

同じところをグルグルと回っているだけにしか見えぬ、もうこれは駄目だと思っていた時、

「あれ、メグじゃん。なにしてんの？」

背後から見知った声が聞こえてきて、わたしは背後に振り返る。

「ああああ　倉子っ、良かったあ……わたしこのままミイラになっちゃうかと思ったよ……」

「そりゃ大げさな。ん〜、いつも通り、道に迷ったワケか。いまメグってば学院とは逆方向に行ってるよ、そっちだと私の砂白高校に行くことになっちゃうよ」

「ああ……やっぱりこっちじゃないんだ……なんとなくそんな気もしてただけぞ」

ここで補足しておく、方向音痴の人間には方角的な正しさは皆無である。つまりどっちにいこうがどちらを選択しようが自己の行

動を疑ってかかる習性があるから。

「しつかたないなー、私がちよつくら校門前まで付いて云ってあげるから、ついて来なさい」

「え でもいいの？」

「幼馴染みのメグをここに放置して、登校出来るほど倉子お姉ちゃん是人非人じゃありません、ほら、置いてくよー」

自転車を降りると、そのまま旋回してわたしが先ほど来た方向に向けて歩き出す。そのまま振り返るとさわやかな笑顔を向けて手招きしてくれた。

彼女は小栗倉子、砂白高校に通う高校二年生。さつき彼女が言ったようにひとつ上の幼馴染み。高い身長、金色のショートカット、流れるように涼やかな瞳。まるで外国人のような容姿だ。

わたしの一つ年上の少女はいつもわたしのことを気にかけてくれていた。

悩んだ時も、落ち込んだ時も楽しい時も、苦しい時でも、共に居てくれた幼馴染み。それだけじゃなくて誰にだって優しくして気遣いが出るスーパードお姉ちゃん。

弱点はちよつと面倒臭がり運動嫌いというところ。「私は文学少女なの」というのは本人の談。実際のわたしは彼女が運動をしている場面を見たことがないからおそらく本当に嫌いなんだろうって思ってる。

いつも飄々としていて、一言で表すなら“軽妙洒脱”

その言葉が最も似合う女子高生じゃないかなってわたしは勝手にそう思ってる。

「で」

大通りに戻ってきたくらいのところを二人で歩いていく。倉子は自転車を押して歩きながら、わたしを見ないままで、

「メグ姫の心境は如何かなー？」

ぼう、と空を見つめながら、そんなことを聞いてきた。

一瞬、何のことだろう？ と悩んでみたがわたしと倉子はあの日以来会ってないことを思い出した。きっとそのことを聞きたいのだろう。

「うん、もう平気かな。」

「そりゃ良かった。私さ、こう見えてメグのこと心配だったから」

こういう気遣いをなんでもないような事のようにサラリと嫌み無く言えるのは、彼女の才能かもしれない。

倉子の言葉はまるで魔法のように、人同士に生じてしまう壁のようなもの、をその涼やかな言葉で解きほぐしてしまう。そんな雰囲気、彼女を、持っているのだ。

「きついと思ったらそう言ってね、じゃないとお姉さんは悲しいから」

「分かってる、なにかあったら倉子に頼るよ。わたしだけじゃ抱えきれないこともやっぱりあるから」

「うん、頼ることは恥じゃない。誰にだって壊れそうになる時は必ずあるから」

「うん、だからこそ、倉子には感謝してるの。あの時倉子が居なかつたら、わたしは本当に对人恐怖症になっていたかもしれないし…」

そういう私の顔を倉子は見つめて、一つ苦笑を漏らすとまた正面に向き直ると、

「でもさ、メグ。一度壊れてしまった心は 元通りにはならない、瑕は瑕のまま、勝手に消えたり、どこかへ言ったりはしないから」

抱え込めば抱え込むだけ瑕の痛みは激しくなる。彼女は言いながら、遠くの空を見つめている。

わたしはその横顔を見つめている。それはどこかここではないなにかを見つめているようで少しだけ倉子が遠くに感じられた。

「ま、私が言いたいことはなにかあったら私に頼りなさいってこと。いいね？」

わたしを見ないまま、どこか穏やかな口調で諭すように彼女は言った。

「うん、当然だよ。だってわたしたち友達じゃない」

「まったくだ、私たち幼馴染だもんね」

ふたりでクスクスと笑い合う、幼い頃から続けられている、ふたりの思いは今もそのまま、なにも変わらないただ穏やかな日々、そうこれからもきつとふたりはそう生きていけるってそう感じられた気がした。

彼女はわたしの瑕がまだ癒えてないのを心配してくれている。たしかにわたしの瑕は癒えることはないのかもしれない。でもそんな時、彼女が側に居てくれるということはとても嬉しい。

ありがとう、倉子

わたしは心の中だけで友人に礼を言うと、やがて見えてきた桜並木にその足を踏み入れた。

/

「到着、つと……人がまばらだね。もうすぐ始業式始まっちゃうんじゃない？」

桜並木のゆるやかで長い上り坂を上がり終えるとその先に大きな校門がある。歴史と伝統を感じさせるような石造りの門、左右に伸びる巨大な壁はまるで障壁、どこかの監獄を連想させるほどに強固な作りをしていた。

何者をも拒絶する外壁、威圧するように聳え立つ門構へ。どこかの城に迷い込んでしまったんじゃないかと勘違いしてしまうほど幻想的な光景に圧倒されてしまう。

「ホントだ。どうしょっ、このままだと始業式に遅刻した生徒って

「ことで目え付けられちゃうよお」

「んーん、いくらスーパー幼馴染みの倉子さんでもそこまでは面倒見られないよ、メグ。ここから先は私の管轄外だもの」

う、意外に冷たい。とはいえ幼馴染みに不法侵入まで犯させて道案内してもらおうというのも道徳的なものでどうなんだろう、とも思うしやっぱりここからは自分の足で行かなきゃいけないだろう。

「大丈夫、ゴメンね。倉子を遅刻させちゃうようなことになっちゃって」

「……別に良いんだよ。メグを放っておけないし。それに私の遅刻は日常茶飯事だから。何とでも言い訳が立つんだ」

「……へー」

相変わらずわたしの幼馴染みは、奔放な生活をしているらしい、気が向かないと学校にもいかない。風の向くまま気の向くまま、本人曰く

「ほら、私って前世がロマだから」

知らないし、前世がジプシーだなんて奇矯な発言を振る舞われると幼馴染みとして色々……その、困る。

そんな異相の人、倉子は気にした様子もなく、こちらの顔をじいっと見つめている。

「そうそう、メグ」

「なに？」

「なんか異性関係のトラブルがありそうだよ」

出た。

わたしの脈拍が跳ね上がる。

彼女の不思議な力。

昔から、彼女はなにかに付けて感が鋭く、捜し物や落とし物を見付けるのが上手だった。そしてそれだけではない。彼女の話だと漠然とだが人の未来を観ることが出来るということらしい。

彼女に言わせれば「普通だよ。少しだけ“人と違う目線”で“人を捉えている”だけだから」とのことらしいけど、未だにわたしは視えた事もないし、他の人も視えたという報告もない。つまり彼女だから出来る特性だったこと。

「異性？ 同性じゃなくて異性なの？」

「うーん、なんだか雑駁としていて、正確に“視え”てこないからなんともいえないけど多分、異性じゃないかな」

これから男子禁制の女子校での寮生になるわたしには一番ほど遠い予言のような気がするけど……

「先生とか……そんならまんす？」

「メグ、年上趣味か、そういえばパパさん好きーって言ってたもんね」

いきなり忘却の底に仕舞い込んで、鍵を何重にも掛けていた戸棚

を空けられた、ガリリとな

思わず顔が羞恥で林檎のように赤く染まってしまい、叫びだした
い衝動を押し殺す。

「そつ、そんな太古の昔のこと、今出すかなあ！」

「はははっ、私に取ってみれば昨日みたいなことなんだよ。十年前
だろうと三年前だろうといつでも変わらないよ、いつの瞬間だって
明瞭なんだ」

その言葉の意味はわたしには理解出来ない、その言葉の質量も“
わたしは知らなかった”。倉子はわたしの様子を見て満足したよう
に微笑を浮かべる。

「うんうん、相伴の駄賃くらいにはなった気がするよ。久しぶりに
メグの乙女力を見たね」

「ぐぬぬーっ、すつごく恥ずかしいなあ。こついつからかいは人の
いないところでやってよね、倉子」

「で、年上好みなわけ？」

倉子の奸計に見事に嵌って「うがー」と乙女力ゼロの声を上げつ
つ倉子にじゃれ付く。校門の前で本校生徒と他校の生徒が暴れてま
すって通報が入らないことを祈るばかり。

「とにかくっ、異性とろまんすになるようなシチュが本校にはあり
ません！」

「ふーん……じゃあなんだろね、私の景観」

倉子が踏み込んできて、わたしの顔を覗き込むようにする。パールアイの瞳が半眼になりわたしの目を凝視している。

ちよ、つと、顔近い……息が掛かりそう。

傍目からお目文字すると明らかにそつちのお人、背景には百合の花。キマシタワコレと思われそうなほど接近している顔と顔。元々、倉子は美人だし、男性にも告白されるが、女性にはそのバイ、でなく倍くらい告白されているほどだ。たしかにわたしから見ても格好良いと思える同性だ。憧れの対象になりやすい人柄だと思う。だからってこれは拙い……

「んーん、“視”え難いなー、まだメグが未開の所だから意識出来ない所為もあるんだろうけどさ」

「そつ、そうなんだ……ははは」

「んー？ なに焦ってるの。私なにかやっちゃったっけ？」

「何でもない何でもない、大丈夫。気にしないでいいから！」

この至近距離はやばいって。倉子の香りと吸い込まれそうな紫瞳に魅入られて、なにもかも捧げてしまいそうな衝動が沸き上がりそうになる。校門の前なのに。

じいっと見詰められる仕打ちに堪えきれなくなって視線をそむけると首を振って煩惱を打ち払う。

「そか。てことで倉子お姉ちゃんからの最後の助言ね。“異性問題に気をつける”ってね」

「異性かあ、なんだろうね、実際」
まるで見当が付かない、いつも倉子が言うことは中っていた所為もありどうも居心地が悪い。

「分かんない。もしかしたら空から降って来たり、校門くぐったら赤ん坊の男の子を拾ったりするんじゃない？」

「あり得ないけど倉子が言うところなりそうだからヤメテ」

きっぱりと否定する様が可笑しいのか笑いを押し殺すように「くくく」と低く倉子が笑う。

「大丈夫、その類じゃない。それだけは保証出来るよ」

いつもより胡乱としているためわたしは複雑な表情になりながらもうん、と一つ頷いた。

「さて、あまり他校の制服で此処をうろついていると変な勘ぐり受けちやいそうだからそろそろ私、行くから」

わたしが苦笑を浮かべている様を見てご機嫌の様子で頷きながら倉子は自転車に跨がる。

「ああ、うん。ありがと、倉子。なんだかすつごく助かったし、気が楽になったカモ」

「気にしない。友情はプライスレス。大切なものだしね」

ウインクを一つするにとっても美人は絵になる。おまけに同期す

るように桜が倉子の周りを彩るように吹き上げていくと、自然まで美人の味方かつ！　なんて馬鹿なことを考えたり。

「ありがとう、倉子。じゃあわたしもそろそろ行くね」

「うん、じゃあまた　暇が合ったら遊ぼうか、電話するよ」

「分かった、じゃあ行ってきます！」

「いつてら。てことで私も行ってきまー」

手を振り合い、わたしは校門の内側へ、彼女は校門から遠ざかっていく。

ふいに立ち止まって、その後ろ姿を見送る。

幼馴染みは振り返ることなく、そのまま地平線の向こうに消えようとしていた。

心細さが沸き上がって、いつもの病魔が這い上がってくる。それを胸の奥で押さえ込むと振り返った。

もう振り向かず　その先へ。

季節は春

桜舞う季節、

咲き乱れる桜葉の乱舞の中をわたしは行く。

暖かな日差しとキンとした風がわたしを包み込んで、幻想に包まれていた憧憬に誘おうとする。

胸を擦る想いはあれど、

今日は新たな一年の始まり、

忘れ得ぬ瑕は痛むけれど、ただ歩く。

まどろみのような時間は終わったのだ。

そうしてわたしの長いようで短かったあの日々が始まりを告げる。
ちよっぴり甘く、ほろ苦い、
黄金色の日々。

4月 わたしは魔王と出会った。

少女の門出とその冒険に（後書き）

初投稿になります。

稚拙な作品ではありますが読んで頂けたら幸いです。

尚、誤字脱字など見つけれましたら教えて頂けたら嬉しいです。

天使たちの午前

煉瓦造りの門はまるで来るものを威圧するようにそびえ立つ。

今は登校する生徒のために開いてはいるが通常、この門が外部からの訪問で開くことはそう多くない。

ここは天使の住処。外界の異物を不用意に招き入れるわけにはいかないのだ。

意を決し、校門をくぐる。

まず感じたのは外界よりも清涼と感じられる空気。

比喩ではなく外と内の空気の質が変わったのを感じる。

外部の毒のような大気とは違う、この世界だけのために用意させた酸素。

理由はわからないけれど、ここはわたしが今まで過ごしてきた世界とは違うのだ、と唐突に理解した。

閉じた世界、という風聞を思い出した。

そう、ここは外と隔絶され此処だけで終始する世界。

この巨大な円上だけの世界なんだということ。今までの常識は忘れないといけない、外での常識はこの世界での非常識かもしれない。

わたしは身を引き締めるように襟とりボンを整えて歩き出す。

正門を通って登校、来客用に整地された通行路を歩るいていく。

ここは外で見た景色の延長、車用に道路があり、左右に歩道がある。内も外も変わらない、まるで街中の延長線にあるようだ。

見上げればヒラリと舞い散る桜の片。ここの桜木はすこし早咲きらしい。

暫く歩いていくと古風な木造建ての校舎が見えてくる。

幸い、わたしの遅れはそれほどでも無かったのか、校庭の中にはまばらに生徒がいた。

思い思いに誰かと談話をしている姿を見るとどうもわたしは乗り遅れたんじゃないかという阻害感を覚えてしまうけど。

社会性を失いかけていたわたしは他者に話しかけるといいう行為自体がとてつもない高ハードルなのだ。

お父さん、お母さん、妹なら大丈夫、幼なじみである倉子もなんとかOK、でもその他の人間はNG。

話しかけようとすれば言葉がもつれて、息を飲み動悸が乱れる、やがて顔が羞恥で火照り、俯くばかりになってしまふという結果。

対人恐怖症とはこういうことなのだ。

結論から言えば、人と接触しないようにすれば解決するという消極的解決に至ったわたしはそれ以来、人との接触行動を可能なかぎり避けるようにしている。

そして今回のことも例外ではないわけで。

そうやって暇を持て余すように、主の像が置かれている庭に立ち尽くしていると急に場が色めき立つ。

なんなのかと、俯いていた顔を上げると鼻腔をくすぐる風。

薔薇の香りだと、気が付いた時、

目の前を赤の女性が通り過ぎた。

否、それは腰下近くまで伸びた長い髪、風に揺れて辺りに五弁花の芳醇な香りを満たす。

それを光に溶けそうなほど白く繊細な指先が梳いていく。

ややつり上がり、強気を伺わせる茶色の瞳、すらりとした体軀は豹のを連想させる。

薔薇の姫君

そんな言葉が脳裏に浮かび上がってくる。

倉子の美しさは野に咲く花。雨風や日差しに見舞われようが力強く咲き誇る市井の花と思う。野生ならではの不揃いな美貌というんだらうか。

対するこの女性は丁寧に温室で育てられ、美しくそしてしなやかに育つことを約束された花、純粹培養された薔薇。足先から爪の先に至るまで無駄な要素などない美の象徴。

観賞に応えるように彼女の髪がムラのない絹のように靡いた。それだけで周囲の空気が熱を帯びる。

隔絶世界に住まう薔薇姫　そんな言葉がふいに浮かび上がり、通り過ぎる少女の横顔を一瞥した。

少女は全員を見渡せるような場所まで足を運ぶと立ち止まり、姿勢のよいたち振る舞いで生徒たちを順繰りする。

「ごきげんよう、新入生の皆さん。私たちは聖徒会役員です。まずは本校に入学おめでとう。聖徒会一同に変わって私が祝辞を言わせてもらいます」

そこまで云い終えらるともう一度順繰りをして息を吸い込む。

「申し遅れたわ。私は聖徒会長、剣束珠希。正式な自己紹介はこの後の始業式で行いたいと考えているけれど、まずはこれから同じ庭で過ごす後輩に挨拶をしたいと思ってみんなに会いにきたの」

感覚的に火を発するほど周囲の熱が昂ぶる。

燃え上がる羨望、周囲の熱とは真逆にわたしの熱は引いていく。

正直言つと、面倒かな。

こつこつこのを苦手をしている所為もあるからだらうか、剣束と名乗った先輩の行動を煩わしいと感じてしまう。

興奮の増埒、そんな光景を外側から退屈に眺めながらはやく芝居が片付くのを待っていたのだけど……。

ふと、目が合った。

他者と視線を合わせてしまうと途端に動悸が怪しくなって、即座に目を伏せて逸らすと、彼女は気にした様子もなくまたしゃべり始める。

「ここは神の庭、神に遣える者としての道徳と教養などの修練は当然でしょうけど、皆さんが本校に入学して良かったと思えるような生活をして欲しい。そのための私達、聖徒会は労力を惜しまないということ覚えておいてちょうだい」

そこまで云うと聖徒会長と名乗った剣束珠希先輩はふかぶかと頭を下げ、誰もがうつとりとしそうな笑みを浮かべた。

後光が差して見えるのは気のせいだと思っ。

静寂に場が沈む。誰一人声を無くしその女性の完成された所作を見つめていた。

やがて夢から覚めるように拍手の音が疎らに聞こえ、それが喝采に変わるまでにそう時間はかからなかった。

真逆の人間、わたしを陰とすると彼女は陽。

けして交わることもない人間なんだろうなあ、となんとなく自虐的思考で遊んでみた。

「ローゼス聖徒会か……」と、言葉に乗せてみたが感慨も浮かばない。

わたしにしてみれば吸う空気すら違う異世界人の話も同じだ。接触することもない相手に特別な感情を向けるはずもない。

わたしは俯いたまま、今の憂鬱な時間が過ぎ去るのを待ったため思考の海へと埋没していく。

「ねえ、貴女。少しいいかしら」

「……………」

考えごとをすると周りの景色が完全に消えてしまふ癖があるから全く気づいていなかった。

薔薇の香り、目の前に聖徒会長で在らされる剣束珠希先輩が立っていた。

「あ、あ、あ……………」

「ああ……………」

キョトン、とした顔でわたしの発言を繰り返す。

「……………あ、あの、その」

……………言葉が出てこない、顔が急激に熱を帯びて感情がヒヤリと冷え込む。準備の出来てない接触はいつもこうだ。赤面し、身体が緊張状態になって金縛りに囚われる。

挙動不審者。その評価が下るのには僅かな時間で十分。モノの五秒でも人は人を断じることが出来る。

薔薇姫、エメラルドグリーンの瞳の涼やかな瞳が細められ、そつと穏やかに相好を崩すとわたしのリボンに触れた。

「落ち着いて。私は貴女を害さない」

少しだけ風に煽られて乱れていたリボンの位置を正しながら剣束会長はわたしにそう囁いた。

少しだけ鼓動が収まる。硬直状態だった筋肉の緊張が解けていく。

「……あ、ありがとうございます……その」

「珠希ね」

「珠希、先輩」

ようやくわたしは対面した人の名前を呼ぶことができた。

「うん、初めまして。鹿島 恵さん」

名前を知ってる？

「あ……のどうしてわたしの名前を知ってるんですか？」

「それはね、私事前に新入生の名簿に目を通しているからよ」

鳶色の瞳でおどけるような片目のまばたきをする。

それにしても新入生全員の名前を覚えるなんて簡単なことじゃない。

そんな離れ業を平然とやって退ける人だからこそ生徒会長なんてものが出来るんだろう。

「けどそれだけじゃないの」

「どういうことですか？」

「私、鹿島さんのこと知ってるから。正確には鹿島恵さんを知ってるんじゃないって鹿島さんの家を知ってるってことね」

穏やかな笑みを崩さないまま、リボンの位置がようやく決まった

のか「よしっ、と」と言っつてうなずいた。

「……魔女でしょ？」

「え？ どうして……」

「うん、私も魔女だから」

誰もを魅了するようなまぶしい笑顔、剣束先輩はわたしを真っ直ぐ見つめたまま、

「鹿島さんの御爺様にはよくしてもらったと私の父がよく話していたから」

そう答えた。

確かに、わたしの家系は元を辿れば魔法使いの家系だ。

けれどそれは昔の話 年々魔法を操る秘業は失われ、わたしの代には普通の家となんの変わりないものになってしまっていた。

残った秘業は昔は魔女だったことがあるという歴史だけ。

もう魔法使いとしての鹿島家は形骸化してると言っても過言じゃない。

だから魔女の話は縁のないと思っていた。完全に魔法という言葉忘却していた。そして彼方にあつた記憶の言葉が剣束先輩の口からこぼれ出たことに驚いた。

「驚いてるわね。無理もないかな、鹿島家は当代で魔女の職から退任していると訊いていたし」

「いえ、魔女の話は祖父からよく聞いてます。でも剣束先輩の口からそれを聞くとは思わなかったので……」

「そうね、昔話程度に耳にした話を掘り起こされても戸惑うだけかもしれないわね。ちょっとだけ悪戯が過ぎた気がするわ、御免なさい」

そういつて剣柄先輩が頭を下げるからわたしはあわてて肩を掴んで顔を起こさせようとする。

「だ、大丈夫ですつ、大丈夫つ……」

そんなことをされると人の注目を浴びてしまう。そう思うだけで心臓が早鐘を打ってきて、苦しくなる。

でも先輩を心配させるとさらにマズい自体になりそうで、もう涙目になりそう。

とにかく先輩の頭を上げさせて、頷きながら大丈夫と譫言のように繰り返すと先輩のほうも理解してくれみたいで。

「そう？ 他人の事情を考えず発言してしまったし、謝らないとって思ったんだけど。」

「いえ、わたし自身もそれほど自覚もなくて、なんだか他人ごとみたいな話ですから」

「……そう、それなら良かった」

それを聞いて胸を撫で下ろすように相好を崩す。思わずその笑顔に見惚れてしまった。仕草ひとつとっても洗練されていて嫌みにならない。人の作り出す美の頂点を見ているようだ。

「ねえ鹿島恵さん、恵って呼んでもいいかしら」

「えっ、あっ？」

遠くから見守っていた剣束先輩のファンが取り巻き、それらが一斉に声をあげる。

どつという展開なんのかわからない。作りモノめいた白い指先がわたしの頬にかかる黒髪を撫でている。その行為でわたしは完全に借りてきた猫になった。発火物が近くにあるときつと燃えるほど熱量を含んでる気がする。

「恵」

「は、はははっ」

「ははは？」

「はい、剣束先輩……」

満足そうな笑みを浮かべたまま、わたしの頬にかかる黒髪を撫でる。

「珠希、でね」

「は、はっ、はいつ、珠希、せ、先輩」

訂正、猫じゃなくてネコなのかも……。

先輩はそつと顔を寄せ、頬と頬を重ねるところだった。

「恵、これからよろしく」

と。

ゆっくりと身体を起こしおどけたような顔。

ごきげんよう、と化石めいた言葉を言っただけのまま背中を向けた。わたしはというとまた硬直したまま。それが挨拶だということに気づくと慌てて頭を下げてごきげんよう、と返した。

もつれるような挨拶をしてしまうと、同級生たちの嘲笑が聞こえてきて、

わたしはそれでまた真っ赤に染まった。

天使たちの午前（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。

導入部分ではありますがもう少し少しお付き合い頂けたら嬉しいです。

毎度の事ですが誤字脱字などあればご報告お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2273ba/>

魔王と輪舞曲を

2012年1月6日18時47分発行